

平成29年度
青森山田学園事業報告書

学校法人 青森山田学園

I. 法人本部

1. 平成29年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

社会の発展に寄与するための健全な心身の発達をはかるとともに、実践力に富む個性的な人間の育成を目指した。

実践的な能力を持つ人材の育成を通じて、地域社会に貢献することが本学の掲げてきた精神である。具体的に脳と健康科学研究センターは、本学がこれまで蓄積してきた健康に関わる多様な知的財産を「健康科学」というテーマのもとに融合し、地域に活かしていくという重要な役割を担った。さらに、今年度は、創立100年を迎え、この節目の年をスタートとして、変化する社会の期待に応え、脳の働きから健康を考えるという独自の視点を持つ研究センターとして活動を進めていく。

(2) 組織改革計画

学園全体のガバナンス強化を踏まえ、さらなる人事異動と要員調整により、学園の運営体制を確かなものに改革していくため、入学者確保、人員削減・経費削減に取り組んだ。特に、情報教育センターを中心に5G時代に備えた学校経営を展開するための基盤固めを行った。

2. 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

園児、生徒、学生の入学者確保に努め、大学は2年連続300名以上、高校は400名の大台を数え、中学は連続して80名以上となったが、専修学校・高校専攻科・幼稚園の入学者獲得の対策が課題とされた。また、国際教育センターが中心となり、諸国と連携をとり留学生確保の取り組みを行った。

(2) 教育内容の向上目標

校訓「誠実」「勤勉」「純潔」「明朗」の実現に努めるとともに、特に中高一貫・高大接続の魅力ある教育の継続展開を行った。また、教育環境の整備を計画的に行った。

(3) 教職員研修計画

職員のスキルアップ、意識改革を目的としたSD研修を計画的に実施する。

II. 青森大学

1. 平成29年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

青森大学は、地域社会に貢献し、地域とともに生きる大学として、学則第1条第3項に示す、次のような教育理念に基づき、教育研究活動及び社会貢献活動を行う。

(ア) 青森の豊かな自然と文化の中で人間性と確かな教養を培い、社会に役立つ基礎学力、技術及び専門知識を身に付けさせるための実践的な教育を行う。

(イ) 教員と学生の親密なコミュニケーションを通じて、教員が個々の学生の能力を十分に引き出すための親身な指導を行う。

(ウ) 大学の知的財産を活用することにより地域への社会貢献を行うとともに、地域との親密な交流を通じて地域から愛される大学となることを目指す。

本学の使命を達成するため、青森大学のガバナンスの改革・確立が不可欠である。このため平成 24 年度から「青森大学ルネッサンス」を進めており、「大学の運営」「教育研究」「社会貢献」にわたる様々な改革が行われている。改革を途切れなく進めていくため、上記 3 つの教育理念の実現のため、PDCA サイクルなどをより厳密に構築し、教育内容及び方法の改善をさらに進めていく。

改革実行のため、大学の理念・方針について全ての教職員が十分に理解し、教職員が一致協力の態度と意欲を持って、大学の魅力の一層の向上を目指し、一体的な改革を進める。そのため、学長の権限と責任が果たされるよう、青森大学のガバナンスを確立するとともに、学校法人理事会と連携を取り、建設的な関係の構築に努める。本学は、平成 29 年度に大学機関別認証評価を受審し、4 つの基準（使命・目的、学修と教授、経営・管理と財務、自己点検・評価）とその下位基準である 22 の基準項目の全てにおいて適合と評価され、「大学機関別認証評価 評価報告書」において、大学として適合の評価を受けた。評価報告書では、本学の「優れた点」として、①「青森大学ルネッサンスを提唱し、学生に身に付けてほしい「3 つの力」を具体的に示すとともに、「青森大学基礎スタンダード科目」の設置によって基礎・教養教育の再構築を実現し、特色のある教育を展開していることは高く評価できる。」、②「「地域貢献基礎演習」「地域貢献演習」等、地域に貢献できる大学として、具体的かつ重要な科目を設置し、地域と密着した教育を行っていることは高く評価できる」、③「学長が統括する「教学改革タスクフォース」の設置と運営によって、大学の教育における継続的な改革を実行していることは高く評価できる。」、④「大学独自の「自己点検・評価シート」を作成し、報告と報告書に関するエビデンスを併記するようになっていることは高く評価できる」の 4 項において本学の教育が高く評価された。しかし、基準 2（学修と教授）の基準項目 2-1（学生の受け入れ）において、改善を要する点として「薬学部薬学科の収容定員充足率は、0.7 倍未満であるため改善を要する」の記載があった。また、基準 3（経営・管理と財務）の基準項目 3-3（大学の意思決定の仕組み及び学長のリーダーシップ）において、改善を要する点として「大学学則第 53 条第 3 項（第 2 号に掲げる挙げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長が定めるもの）について、明確には定められておらず、周知されていない点は改善を要する。」の記載があった。これらの改善を要する点に関しては、平成 33 年の 3 月までに日本高等教育機構に改善報告書を提出する予定である。

薬学部は、平成 29 年度の教育内容を対象として、薬学教育評価機構の評価を受審する予定である。本学の、薬学教育に関する自己点検評価書は、3 月に草案を提出し、薬学教育評価機構の事務局が、その草案に対して、薬学教育ハンドブックに記載されているルールに基づき、書面で事務的な質問及びアドバイス等を示し、その書面内容に基づき、平成 30 年 5 月 9 日までに、青森大学薬学教育評価書の最終版を提出する

予定である。この評価の目的は、1) 機構が定める「薬学教育評価 評価基準」への適合認定を行い、各大学における薬学教育プログラムの質を保証し、2) 評価の結果を各大学にフィードバックし、各大学の薬学教育プログラムの改善を促進し、3) 評価の結果を基に各大学の薬学教育プログラムの質を社会に示し、広く国民の理解と支持かが得られるよう支援することとされている。平成 30 年度には、6 月及び 7 月に評価グループからの書面質問があり、7 月 20 日までに回答することになっている。10 月には実地調査が行われ、平成 31 年の 3 月に最終結果が出て発表される。

青森大学は、これまで青森県、青森市、平内町等地方公共団体、青森商工会議所、青森県中小企業家同友会等経済団体との連携や高等学校との連携、接続を拡充強化し、地域社会の再生・活性化の拠点としての役割を果たしてきた。そのような地域との連携をさらに進めるとともに、国内外の大学との連携をも推進し、大学間ネットワークの構築に努めてきた。平成 29 年度は、私立大学等改革総合支援事業におけるタイプ 5 (プラットフォームの形成) に、青森市内の他大学・短期大学との協働により採択された。この事業は、全国で 9 つの採択事業の一つで、青森市産官学連携プラットフォーム中期計画 (平成 29 年度～33 年度) に基づいて、青森市内の高等教育機関への進学率の向上、青森市内への就職率の向上、自治体、産業界、高等教育機関との連携の一層の強化を目指すものである。来年度は、今年度の事業実績に立脚し、発展型として当該事業を継続していく。

(2) 組織改革計画

経営学部は、開学時から現在に至るまで、経営学士の学位を取得できる教育課程に基づいて、教育研究及び社会貢献を展開してきた。これに加え、スポーツビジネスの分野を対象とする教育研究を展開しつつ、情報システムや社会学などの関連分野についても、総合的に学ぶことができる学部となっている実態をより鮮明にするため、平成 29 年度より「総合経営学部」に名称変更した。また、総合経営学は、過去 3 年間の入学者数が入学定員を大きく上回っていることから、平成 31 年度の入学者数を増やしたい。社会学部とソフトウェア情報学部については第 3 次グランドデザインの策定時、平成 31 年度からソフトウェア情報学部を募集停止する一方、社会学部における社会学士の育成のための教育に必要と考えられるソフトウェア情報関係の教育を充実強化する方向で検討しつつあった。文部科学省と事務相談を行いながらカリキュラム案を確定し、学生募集状況なども考慮しながら将来展望を見据え、手続きを進める方向だった。しかし、現在の社会学部及びソフトウェア情報学の入学者数は、第 3 次グランドデザインの策定時と比較して劇的に改善していること、両学部共に特待制度を利用しないで入学を目指す入学者数が伸びていることなどから、社会学部及びソフトウェア情報学部を独立した学部として残し、学部・学科名称やコースの変更などを行うことにより、それぞれの学部が更に発展していくよう、大学として新たな計画を策定し、今後の方向性を決めていく必要がある。

薬学部については、これまで進めてきた教員の若返りが平成 28 年度までに概ね実現したことを受け、科目担当体制 (特に基礎科目)、教育体制、薬剤師国家試験対策など

に関わる重要な体制と機能の改善のための見直しに着手してきたが、更に基本的な改革が必要である。

これまで、学内委員会などを整理し、大学のより効率的な運営を行うために、学生募集委員会と就職委員会を廃止したが、平成 29 年度以降においてもより効果的な大学運営を目指し、組織の整備を進める予定である。大学機関別認証評価の基準に明記されている学内組織などについては、その構造・機能を効率的に展開できるよう、体制を整備・確立して、基準・基準項目などに適合するように実施してきた。

事務局については、これまで行われてきた改革を継続し、特に教務に関する業務は、すべての学部を対象として行うこととするなど、慣例的に続けられてきた従来の組織の在り方を見直していく。

これまで様々な努力をしてきたが、薬学部については入学者数の増加につながっていない現状であり、学内の体制及び機能強化に加え、対外的な関係も視野に入れた抜本的な対策が必要である。

また、大学全体の運営に関して教職協働を生かし、学長ガバナンスの下で学生が必要とする教育・研究環境を提供する。さらに、法人本部の「情報教育センター」や「青森山田スポーツ健康センター」との適切な連携を進めている。

2. 教学に関する計画

平成 28 年 12 月に本学の 3 つの方針（卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針）を改訂した。この新たな 3 つの方針に従い、教学の改革と入学者募集推進の方策を強化した。更に、学修成果の評価に関する方針（アセスメントポリシー）を策定し、主体的・継続的に学修を行う能力を適正に評価できるよう基準を整備し、改革の推進を図っている。

（1）志願者・入学者獲得の計画

青森大学の持つ、文系・理系がそろった総合大学としての教育目的や特徴を十分に発揮し、青森大学で学ぶことが、未来を切り拓き、社会で役立つ実践力を身に付けることになることをしっかりと理解し共感する生徒が一人でも多く応募するような募集活動を展開する。そのために、青森大学の強みであり、目標である「地域とともに生きる大学」、「学生中心の大学」との考え方の広報周知に努めており、これまでの学生募集方法に加えて、近隣大学との違いや魅力を明確にした手法として、教員が高等学校に授業などの指導で訪問し、入試課が大学の内容及び奨学制度などの詳細を説明する方式が効果を発揮している。更に、学生の就職活動支援に関する体制の整備と教職協働による強力なキャリア教育の強化を通して、学生の就職先の質の向上を実現し、学生募集につなげていく方策を模索している。

青森大学の教育が常に変革を続けていることを具体的に発信し、高校生、高校教員、保護者などに広く理解してもらうためには、本部と大学の協働が最も重要なポイントの一つである。学生募集活動は、大学の主体性を生かし、学園本部、大学事務・教員が一体となって実施する必要がある。学生募集のための教育内容、教育の成果、高大連携などの活動は、平成 29 年度の学生募集計画に基づいて展開し、薬学部を除く 3 学部に関

しては、入学定員の約 1.29 倍までの入学者を確保することができた。また、スポーツ・文芸特待生募集の数が減少、一般入学者数が増加する傾向が見られたことから、来年度もこの方向性を維持すべく更に改善を加える。

総合経営学部、社会学部は、受験生の母集団が大きく変わらないことから、学部独自の教育内容をアピールしながらも共通のプラットフォームで一般受験生の募集を推進した。理系学部である薬学部に関しては、他学部と受験生の母集団が異なることもあり、薬剤師の使命や薬学部の魅力を前面に押し出した募集活動を展開したが、不十分な部分を改善する必要がある。

学生募集に関しては、平成 28 年度の実績が上がっていることから、基本的には前年度の戦略を踏襲し、本学教員の高等学校への派遣の向上など改善できる部分は改善した。青森山田高校を対象とした募集活動は、高校の授業の一環として定期的に大学教員を高校に派遣し、青森山田高校の生徒に大学のキャンパスを体験してもらうイベントを企画するなど、積極的に青森山田高校との連携・接続を実施することなどにより強化した結果、40 名であった平成 27 年度の青森山田高校からの入学者は、平成 29 年度は 87 名まで増加した。平成 28 年度から、留学生の受入れ人数を増やしているが、平成 30 年度へ向けて、より質の高い留学生の獲得に向けて活動する。編入学・社会人入学に対する募集も担当者を設け積極的に進めている。学生募集に関する広報内容（広報に流す教育成果や教育動向など）は、各学部で実施している様々な教育活動をより頻繁にメディアが取り上げるよう教職協働のチームで展開する。オープンキャンパスは、従来以上に学生が参画した企画を行うために、普段から教員と学生のチームなどを構築するといった活動を開始しているが、それらの取組みをさらに強化している。

高校訪問については、訪問高校出身学生の情報を蓄積し、継続的に次の訪問へ活用することが必要である。卒業生情報として、成績、出欠状況、普段の学修・生活態度などに加え、就職の方向性など、細部にわたりきめ細かに情報を蓄積し、常に提供できる状態とするため、教務・学生課、就職課などからの学生情報の一元管理を進め、協働体制を推進している。

（2）教育内容の向上目標

平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申による、学士課程教育の質的転換を念頭に、既存の教養科目を見直し、体系的に基礎教育を行う教育課程へ再編した「青森大学基礎スタンダード」を平成 25 年度に全学的にスタートさせ、本学の教養教育の質的転換を進展させてきた。特に、平成 29 年度は、本学における英語教育と高度情報化社会に対応する IT 教育についての考え方をまとめている状況である。

また、平成 26 年 12 月の中央教育審議会答申による高大接続の改革に沿って、平成 29 年度は、各学部の専門科目についても精査を行い、平成 30 年度へ向けて合理的、体系的な教育課程への再編計画を推進する。この教育課程の再編は、平成 28 年度に構築した新たな 3 ポリシーに基づいたカリキュラム構築、教育方法の実施、学生の学修、教育評価などが展開されているか、などについての調査・評価などに基づいて実施する予定であ

ったが、教職課程の再過程申請の為、この計画は平成 32 年度からの実施とした。また、シラバス作成要領に基づいてシラバスが作成されているかなどを調査し、学生の到達目標の達成度、授業方法、授業計画及び授業時間外の学習や成績評価の基準等の事項などについて点検を行い、本学の教育の質的転換が成果を上げていることを確認するとともに、改善を推進する。特に、「学生が何を学び、身に付けるか」という視点に立って、教育方法にアクティブ・ラーニングを取り入れるなどの改善策に関する促進・確認を行い、教育効果の向上を目指している。

学生が納得できる就職を実現できるよう、キャリア特別実習を新設し、キャリアデザインや就職活動実践演習の教育内容をより実践的に改善するとともに、授業外の就職サポートプログラムを充実させる。また、現在行われている各種資格・免許の取得に関する教育についても継続して取り組む。さらに、公務員志望者のための特別プログラムの充実を図り、学生募集へとつながるよう高等学校などへの広報を充実する。

加えて、このところ毎年獲得数を伸ばしている科学研究費補助金や、学長裁量経費による青森大学教育研究プロジェクトなどの成果に見られるように、急激に向上している本学の研究能力を更に充実させ、本学の研究成果を広く青森地域及び全国に向けて発信し、青森地域の高等教育機関の研究の中心的役割を担えるよう、教員の研究活動の充実、活性化を図る。また、新たに設置する「脳と健康科学研究センター」における研究活動の充実を図ることなどにより、青森大学の研究ブランディングを確立する。

(3) 教職員研修計画

年 2 回の教職員研修会の充実を図り、全学的な FD 及び SD に関する動向を共有し、意識改革に積極的に取り組む。また、FD 及び SD とともに学外における研修の機会を活用し、その成果を教職員間で共有するとともに、教職協働の改善に努める。特に、各科目のアクティブ・ラーニングを一段と推進するために、学内の授業公開や授業実践研究ワークショップを企画し、多くの教員の参加を促し、大学全体の教育力の向上を目指すとともに、補助金の獲得に関しても積極的に対応する。本学は、青森県内で最も高額な補助金を獲得しているが（平成 29 年度）、この状態を維持するためには継続的な教職協働の活性化が必要である。

Ⅲ. 青森山田高等学校全日制

1 平成 29 年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

中高一貫教育の推進を基に校訓（誠実、勤勉、純潔、明朗）の実現に努力し、社会の発展に寄与すべく健全な心身の発達を図るとともに実践力に富む個性豊かな人格の育成、および品性の陶冶を中心に教師と生徒の人的交流が図れるべく努力する。そのために 4 つの重点目標を掲げる。

- 1) 学力の向上をはかり、個別指導に重点を置く
- 2) 生活態度を厳正にし、かつ人間味のある教師と生徒の交流を図る
- 3) クラブ活動、部活動を通して、青年期の精神生活の確立を会得させる

- 4) 生徒会活動に於いて社会性を持たせ、人間的尊重の精神を養う
- (2) 組織改革計画
- 1) 管理者として
- ・基本姿勢、使命感と責任感
「教育者としての使命感」をベースに持ち、学校に期待される目的・目標を達成する「学校経営者」としてのリーダーシップを発揮。
 - ・学校ビジョン構築
学校教育目標の実現に向け、学校の中期・短期（年度）双方の視点から、取り組むべき重点事項を明確にし、実現のシナリオを描く。
 - ・環境づくり
学校教育目標の実現に向け、学校内外の「人的資源」「物的資源」「資金的資源」「情動的資源」「ネットワーク資源」を最も効果的に活かすため、学校の組織づくりや環境整備を行う。
 - ・人材育成
学校の各種活動を通じて、自らと教職員の能力を向上させ、人としての成長を促進させる。
 - ・外部折衝
学校の各種活動を効果的・効率的に進めるため、学校外部に理解を求め、外部とのネットワークを構築する。
- 2) 教職員に望むこと
- 教育は人なり。学校教育の成否は教職員の資質能力にかかっている。したがって、教職員には専門的な知識を深め、指導力を高めてより工夫された教育活動を展開できるよう、日々自己研修に努める。
- ・大所高所から物事を考えられる教職員であれ（「木を見て森を見ず」ではダメ!）
 - ・生徒の目線に立って観察する洞察力をもつ教職員であれ
 - ・厳しくあり優しさのある教職員であれ（理解と迎合の区別）
 - ・積極的な実践力とたくましい行動力を持つ、熱い信頼される教職員であれ
「教員は親ではない、兄弟でも友達でもガキ大将でもない、でも、そのすべてでありたい。」
- 3) 基本的な経営の指針
- ・日常的な実践
3Cの精神 ①チャンス（chance）………好機到来と判断されたら
②チャレンジ（challenge）……果敢に挑戦するようにし
③チェンジ（change）………改善変革を大胆に図る
 - ・職場のモラルの向上
どういう職場であれ、一番大切なことは「モラルの向上」である。それを支える大黒柱は、人間である。「和を以て貴しとなす。」
 - ・モラル向上のためには
①「今まではこうした」とか「去年まではこうだった」とかは禁句にして、「何

を」「どう」やらなければならないかを明確にしていく。

②職場を構成する一人ひとりが次の4つのものを持ち合わせる努力をすることが大事である。

活力・生命力 (Vitality)、 知識・技術 (Speciality)

独創・創造 (Originality)、 個性・持ち味 (Personality)

※「個性・持ち味 (Personality)」が職場のモラル向上と直結する。

③教育課程の一連の推進の中で「計画」・「実施」・「評価」とよく言われる。しかしこれに加えて大事なのが教育課程全体を見て、次年度には何をどう「改善」していくかということを確認していく必要がある。

4) 教師の共通理解、共通指導

・生きがい、居がいのある、明日が待たれる学校

まず、教職員間の関係が温かいものでなければならない。そのためには、例外を除いて情報を共有することを原則とする。

・授業の工夫

時間の工夫、発問の工夫、問題解決的な学習の工夫に心がけ、授業のプロ・学級経営のプロ・生徒指導のプロとして活躍できる力量をつけられるよう日々教材研究に努める。

5) 検討の方向

教育組織の見直し、そのあり方について引き続き検討する。

2 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

中学校段階での進路指導は、「入れる高校から入りたい高校へ」の転換がなされてきた。しかし、残念ながら未だに輪切り状態が続いており、このことが学校の伝統、過去からの実績、学校への信頼・協力ということにつながっている。

子どもを「青森山田に預けて良かった!」と言われるよう一人でも多く、本校へ入学させる。

(2) 出口の保障

教職員一同、一枚岩になって共通理解、共通指導、共通行動のもと進学指導に当たったが、推薦入試、AO 入試においてスポーツコースの生徒が不合格となる例が多く出た。同一大学を複数回受験し合格したり、志望校を変えて合格したりと、最終的には進学できた結果となった。しかし、明らかに昨年度とは違い、入試制度が変化してきていると考えられる。今後もさらに厳しくなることが予想される。2021年度入試(現1年生)を皮切りに2025年度にはほとんどの大学が入試制度改革を行う。受験方法、評価方法、調査書、推薦書が大きく変わる。これまでとは違い、大学側が調査書に「こういった項目を記載してほしい」と要望できる形になっていく。調査書の記載方法はこれまでの箇条書きではなく、非常に綿密に書かなければならず、生徒一人ひとりの学びのDATAの蓄積が必要になる。これらのことを我々教員がしっかりと理解し様々な入試制度に対応する能力をつけなければならない。就職においては調理科を中心とし、就職率100%、希望

通りの就職先に就くことができた。

① 入学者獲得の手立て

- ・東青管内の中学校における生徒対象学校説明会を6月から11月の期間に全27校実施。また、校長、進路指導主任等を対象とした学校説明会を10月に実施した。
- ・生徒・保護者対象の青森山田高校進路相談会の実施（11月下旬）
- ・推薦入試、A日程入学者選抜終了後、東青地区27校の中学校への本校教職員の個別訪問による募集活動を実施した。
- ・保護者への働きかけ、教員同士の情報交換および各中学校との密接な情報交換
- ・ホームページでの教育活動の配信は毎日更新し常に新しい情報を配信した。

以上のようなことから2018年度は推薦試験で321名、A日程選抜試験で79名、B日程選抜試験で4名、合計404名の入学者となった。青森市管内の他私学と比較しても、東奥学園153名、明の星162名、野辺地西77名、松風塾10名、4校の合計402名を上回る結果となった。青森山田中学校の在籍が各学年とも80名前後あり、来年度以降も積極的な募集活動を展開し引き続き400名の入学者を獲得できるように努力をしたい。

② 特進コースとしての働きかけ

- ・小学校5・6年生対象の英語・数学の勉強会の実施（1月～3月）
英語検定5級、数学検定5級取得を目指して
- ・中学校3年生対象の高校受験に向けた入試対策、国語・数学・英語・理科4教科の個別指導勉強会の実施（12月～2月）
- ・推薦入試での本校特進コース合格者に対する先取り勉強会の実施（2月～3月）

(3) 教育内容の向上目標

学習指導要領、社会のニーズ等に即したカリキュラムを作成し、各教科、分掌等の効果的運営を図る

(4) 教職員研修計画

① 目的

- ・基礎学力の定着と活気ある授業の推進に努め、担当教科のみならず、分掌、学年と密接に連携し生徒の確かな学力向上を図る。
- ・日頃から生徒の学力状況を把握し、個に応じた個を生かす授業、生徒の学習意欲を引き出す授業を目指す。

② 研修内容

校内研修 1) 授業研究・・・ 研究発表、授業公開

2) 職員研修・・・ (株) リクルートマーケティングパートナーズ

「キャリアガイダンス」編集長 山下 真司氏を講師に招き

「教育改革を見据えた新たな学びの展望」～今、高校に何が求められているか～の演目で12月21日(木)に実施した。

校外研修 1) 総合学校教育センター等の研修

2) 青森県高等学校教育研究会

3) 私学研修・・・青森県私学研修会、全国私学研修会

- 4)先進校視察……学力向上の参考となる学校視察
- 5)分掌・教科等の諸研修会……全国・東北・県大会等
- 6)その他……自己の専門性を高め、教育活動の充実を図った。
有職者による教職員への講話を実施した。

IV. 青森山田高等学校 通信制課程 青森校

1. 平成 29 年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

本校は教育基本法の「教育の機会均等」の趣旨に沿い、全日制高校とは異なり、不登校や学習障害・心的障害や教育相談センターに通う生徒など、心に何らかの負荷を抱えた生徒を多数受け入れている。このため、親切・丁寧でかつ親身の指導を実現している。

(2) 組織改革計画

入学者の特性を踏まえ、随時入学を認めているため、在学者数は変動している。女子教員の補充が検討され、3月末に人事異動の内示で、30年度の女子教員の採用が補充されました。

2. 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

本校の特色は、全日制課程の高等学校と同じ3年間の「**学年制**」であることで、青森校、札幌校共通の「教務規程」を作成、共通理解による共通指導を実現した。

これらに加え、本校の何よりの特色は細かな親身の指導、教育を実践した。

様々な事情で高校へ進学しなかった方、休学した方、退学した方、社会人の方などに対して、再入学・編入学のアピールを図った。

今年度は平昌冬季オリンピックが開催され、ホームページを活用して、卒業生の近況報告を実施した。

(2) 教育内容の向上目標

青森校は青森大学キャンパスの施設設備を活用しており、トップ講座（学長講話等）や青森大学教員による授業を展開した。

また本校は、関連校（青森大学・自動車専攻科・ヘアアーチスト専門学校）への推薦入学制度、授業料減額制度を有しており、これら大学等への優先的入学が認められ、青森大学には26年から28年においては3年連続6名の進学。

また、29年には8名が進学し、青森県ヘアアーチスト専門学校には2名の進学、自動車専攻科に進学させることができませんでした。

まだまだ進学者が少ないが、教育内容の充実もあり志願（進学）者獲得に貢献したのではないかと。

(3) 教職員研修計画

教職員の共通理解・共通指導を推進として、札幌校の卒業式に現地見学した。
教員・講師等の充実した授業展開、日々教材研究に努めた。

V. 青森山田高等学校 通信制課程 札幌校

1. 平成 29 年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

青森校と同様であるが、全日制高校と異なり不登校や学習障害・心的障害や教育相談センターに通う等、心に何らかの負荷を抱えた生徒が多数を占めるため、親切丁寧でかつ親身の指導を実現している。

(2) 組織改革計画

北海学園大学及び北海学園札幌高等学校の非常勤講師の先生方による協力やサポートにより親身の指導に努めた。

管理(教頭)職への検討がなされ、3月末に人事異動の内示で、30年度から実施された。

2. 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

札幌市内及び近郊の中学校、教育相談センターを訪問して新入生の募集に努めた。
全日制課程の高等学校からの転入学を積極的に受け入れた。

今年度は平昌冬季オリンピックが開催され、2年生大久保勇利選手が男子スノーボードビッグエア、スロースタイルの2種目に出場。札幌校のウイークポイントに繋がっている。

(2) 教育内容の向上目標

教育課程に基づいた通信課程の充実を図り、充実した教育内容で指導した結果、青森大学ソフトウェア情報学部へ3名進学した。

(3) 教職員研修計画

- ・教職員の共通理解、共通指導を推進させた。
- ・青森校との研鑽や情報交換で、青森校の施設及び現地見学計画。

VI. 自動車科専攻科

1. 平成 29 年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

ア. 資格(国家二級自動車整備士)取得確保を最大の目標とした教育。

(ア) 全国的に整備士不足が問われており、国土交通省運輸局あげての人材育成を掲げており、それに伴い地元業界の整備士需要が多く、その育成は地域の活性化の原動力となる。

【結果】

- ◆資格取得については全員合格がかなわなかったが、1名の家事従事者以外は全員ディーラーに整備士として採用された。

(イ) 女子整備士の養成も業界のニーズとして求められており、女子学生の入学を推進する。

【結果】

◆平成30年度は、女子学生は1名の入学が決定している。

(2) 組織改革計画

教員の平均年齢が54歳と高齢化しており、女子学生の対応を兼ねた若い教員の採用など将来を見据えた教員採用補充をしていく。

【結果】

◆臨時事務職員の採用により事務的業務は緩和された。また、非常勤講師の採用により授業時間が少し緩和されたが、やはり教員の高齢化は否めない。

将来的に若い人材の登用が不可欠である。(希望者あり)

2. 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

近年の若年層の自動車への関心度の希薄は否めないが、昨年度(33名)以上の入学者数の確保が必須である。

本校の知名度は、昨年は低かったが、女子学生の入学は各高等学校にかなり波及した。昨年度より、制服廃止・奨学制度の確立、オープンキャンパス実施により本校への興味、理解度は深まりイメージアップにつながっている。

これらをベースに、自動車科を有する高校(青森山田・弘前東)や実業高校と、今年度はさらに青森市内の高校生の獲得を最重要課題として獲得を図りたい。

並行してホームページを通し、一般社会人にも資格取得の利便さ・整備士需要の多さをアピールし獲得したい。また引き続き、留学生の獲得にも学園国際教育センターと連携を図り推進している。

【結果】

◆他の資格取得においては、「中古車査定士試験」において全員合格という快挙を成し得た。

◆オープンキャンパスの実施(3回)

《参加者》 1回目=18名、2回目=14名、3回目=9名

◆入学者の推移

	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
入学者数	21名 (女子0名)	33名 (女子3名)	32名 (女子4名)	19名 (女子1名) ※留学生2名

(2) 教育内容の向上目標

教育理念に沿った資格(国家二級自動車整備士)全員取得の構築を図るため、早期の指導展開を進める。また、在学中に取得できる資格(中古車査定士、損害保険募集人資格等)に多くチャレンジさせる。

各自動車ディーラーに、新機構の技術講習会等を積極的に導入する。

昨年度から、週1単位の「教養」授業を設定し、入社後に整備以外でも対応できる能力・マナーを習得させる授業を実施した。また、就職試験に関する授業展開も行っている。

【結果】

- ◆資格取得のための早期指導は、教員全員で当たり好結果をもたらした。
- ◆学生は他の資格も数多く取得し、専攻科ならではの特性を生かした。
- ◆一昨年から実施した「教養」の授業は、学生に好評であり、ディーラーからも評判が高い。
- ◆企業合同説明会を本校にて実施（2月8日）＝20社参加
- ◆ディーラー技術講習会を8回実施

回	月 日	講習会名
第1回	5月18日	スズキフレッシュマンセミナー
第2回	5月19日	マツダ春の技術セミナー
第3回	6月23日	三菱技術講習会
第4回	10月13日	マツダ試乗・技術講習会
第5回	10月20日	トヨタカローラPHEV技術講習会
第6回	11月17日	ダイハツサービスツール技術講習会
第7回	12月8日	スズキ技術講習会
第8回	1月22日	三菱ふそう技術講習会

- ◆青森三菱自販より教材車寄贈 PHEV車・EV車各1台。

(3) 教職員研修計画

年2回（夏・冬）の校内研修を回り生徒募集・教材研究・学校運営に積極的に参加する体制を確立する。

【結果】

予定通りの研修会を実施し（7月21日・12月22日）、問題解決を図り、来年度の展望や体制も確認した。

VII. 青森山田中学校

1 平成29年度の基本構想

(1) 基本理念や使命

- 1) 中高一貫教育の推進を基に校訓「誠実、勤勉、純潔、明朗」の実現に努力し、生徒一人ひとりの持つ「無限の可能性」を引き出し、伸ばし、育てることを目標として実践した。
- 2) 今年度は59名が青森山田高校に進学したことから、中学校として高校の入学者実績の向上に寄与することができた。
- 3) 青森山田高校以外の進学を希望した14名への受検対応を適切に行った。
- 4) 具体的な重点目標として以下の点を掲げ実践した。
 - ① いじめのない安心・安全な学校生活を過ごすためにスキのない手厚い指導。

- ② 平成29年度入学生より、スポーツコースを普通コースに名称を変更し、文武両道を重視した学校生活の基盤を確立し、文化・芸術の分野においても優秀な生徒の獲得を目指す。
- ③ 中高一貫校としての6年間を見通したカリキュラムの実施のために、特進コースの中高6学年を高等学校の校舎に配置し、計画的・継続的な教育指導を展開し、先取学習により医大、医学部・医学科、難関大学合格を目指す。
- ④ 学力向上のための個別指導を積極的に実施する。
- ⑤ 学校生活において、人間関係の在り方を学ぶ。
- ⑥ 中学生としての生活習慣を確立するとともに教師と生徒との信頼関係を築く。
- ⑦ 地域社会との連携を積極的に図る。

(2) 組織改革計画

1) 義務教育としての領域内で、尚且つ中高一貫教育校として他校では真似できない指導体制を実施するため、中高教員の流動的な教育組織の編成を行った。

2 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

- 1) 平成30年度生徒募集においては、年度当初より「輝くダイヤになれる場所」というコンセプトを前面に出し生徒募集を行った。学校訪問や学校説明会において映像を駆使し、児童や保護者にわかりやすく興味を湧かせ期待を抱かせる説明を行った。その結果、I期入学試験に107名、2期入学試験に59名の合計166名が受験し、昨年度より36名の受験者増となった。(倍率：昨年2.5倍から今年は2.8倍)
- 2) 創立100周年に向け、これまで以上に受験生を増やし、より優秀な生徒の獲得を目標に掲げ、全員が募集担当者であるという意識を持ちチームとして取り組んだ。
- 3) 学校5年生も対象に含めた生徒募集活動を行った。
- 4) 各部活動毎にゴールデンウィークや夏・冬・春の長期休暇を利用し勉強会を計画的に実施し学習習慣を向上させた。
- 5) 各種検定に積極的にチャレンジさせ、合格のための講習会を放課後行った。その結果多くの生徒が達成感や充実感を味わうことができ、また次の目標に挑戦しようとする意欲につながった。
 - ① 日本漢字能力検定合格 (2級1名、準2級6名、3級48名、4級59名、5級62名)
 - ② 実用数学技能検定合格者 (準2級2名、3級20名、4級6名、5級20名)
 - ③ 実用英語技能検定合格者 (3級9名、4級38名、5級76名)
- 6) ホームページの更新を行事毎に実施し、学校生活の様子を積極的に配信した。

(2) 教育内容の向上目標

- 1) 中高一貫校としてのメリットを生かし中学校の段階から大学入試を見据えた効率的カリキュラムを実施した。
- 2) グローバルな人材育成のためのさまざまな体験学習をとおして、コミュニケー

ション能力を育成し、特色ある教育を展開した。

(3) 教職員研修計画

- 1) 学力向上のためには、教員の資質向上は不可欠であり、その為の自己研鑽に日々努めた。(校長のショート研修、授業の見直し、指導方法の工夫 等)
- 2) 研修会への積極的参加を推進した。(青森市中教研、青森県私学研修会他)
- 3) 県外の先進的な学校を視察することを掲げたが日程的な問題で実施できなかったのでぜひ来年度は実施したい。

VIII. ヘアアーティスト専門学校

1 平成 29 年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

本校の教育理念や使命達成に向け、学生が社会人としての教養と近代的感覚を身につけるとともに、専門性を生かし社会に貢献できる職業人となれるよう、全教職員が一丸となって学生の指導に取り組んだ。

(2) 組織改革計画

新任校長及び顧問(前校長)が中心となって学生募集を行うとともに、学園本部主導によるホームページの更新や学校案内の作成等が広報部門強化の一助となったことなどにより、本校志願者の獲得に成果があった。

また、平成 30 年 4 月施行の規則改正に基づき、平成 30 年度入学生以降の教育課程の見直しを行った。

2 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

① 進学相談会(会場・高校)の参加、学校情報の積極的発信

ホテル等を会場として開催されるガイダンスは、弘前市内を中心に参加し、各高校等で開催されるガイダンスは、中弘南黒地区及び西北五地区を中心に参加し、本校の情報発信に努めた。進学相談会で本校の説明を受けた人数は、昨年を大きく上回り 290 名を数えた。

② 高校訪問の実施

重点地区としている中弘南黒・西北五・東青地区の各高校は 4～5 回程度訪問し、秋田県北地区の各高校は 2～3 回程度訪問するなどして、本校の教育内容等の PR に努めた。

③ オープンキャンパスの内容充実及び参加者増に向けた活動強化

オープンキャンパスは、6 月及び 8 月の 2 回開催し、計 100 名の参加を得た。(秋田県北からは 9 名参加)

④ ヘアモードショーと学校祭のPR強化

ヘアモードショーの参加者は昨年をやや下回ったものの約200名が参加し、学校祭は昨年を上回る84名の参加があった。各高校等への案内が遅れるなど、広報活動には課題が残った。

⑤ 進学情報媒体（進学ネット・情報誌等）の活用

進学情報媒体からの資料請求は、毎年500件以上（H29は527件）あり、本校にとって重要なツールとなっている。今後も、学生募集や広報活動には情報媒体を積極的に活用したい。

⑥ イチコユニットサロンとの連携強化による理美容の魅力発信

イチコユニット事業は3年目を迎え、サロン7社（弘前市内5社、青森市内2社）のスタッフが、就職セミナーや大会出場選手への技術指導、シャンプー授業での指導などで協力していただき、大いなる成果があった。

また、3月末に予定していた「恋'sコレクション」は、各高校の学校行事を勘案し年度を超えて4月初旬に変更したが、「リンゴ娘」の協力を得て内容の充実が図られたこともあり、昨年を上回る48名が参加するなど盛況であった。参加者に理美容の魅力を発信するこのイベントは、本校志望者の獲得にも良い影響をもたらしていることから、今後も業界との連携を密にし、理美容の魅力発信に努めながら本校志望者の獲につなげていきたい。

⑦ 職業訓練給付金制度の活用による社会人志願者の獲得

今年度は、同制度活用による入学志願者はなかったが、県が新たにはじめた「長期人材育成コース」を活用した社会人志願者が2名入学した。

高校生が年々減少していることから、社会人志願者の獲得は学校の健全運営のためにも有効であり、今後は、両制度の周知を徹底することにより、社会人志願者のさらなる獲得に努めていきたい。

⑧ 校外イベント、ボランティア活動への積極参加による学校PR強化

校外イベントは、2年生がファッション甲子園やひろさきハロウィン等の各イベントに審査員として参加した。

また、ボランティア活動として、介護老人保健施設サントハウス弘前を訪問サービスしたり、おしごと体験キッズハローワークに出展するなどして好評を博した。

ボランティア活動は、学生を成長させる場であることはもとより、学校をPRし学校評価を向上させることにもつながることから、今後も積極的に取り組んでいきたい。

(2) 教育内容の向上

① 国家試験全員合格に向けた基本技術及び基礎学力の向上

国家試験の全員合格を目指し、実技及び筆記の強化週間を設けるなどの対策を講じたが、理容科で1名、美容科で4名が合格できなかった。

このうち4名が筆記試験で不合格となっていることから、学習に対する姿勢の確立や強化対策の見直しなどが必要である。

- ② 基本的マナーの確立と学生個々の発想、個性、創造性の伸長
 学生が将来、職業人として活躍できるよう、社会人としての基本的マナーを確立させるとともに、個々人の発想力・個性・創造力を伸長させるよう教育活動を行っている。
- ③ 資格取得対策の強化
 学生が将来、多様な知識と技術を有する理美容師として活躍できるよう、本校ではネイル、メイク、着付け等の各種資格取得を推奨し、その対策を講じている。
 今年度は、従来、東京でなければ受験できなかった SBS ネイルディレクター1級の認定試験が本校を会場として実施できることになり、5名が受験し全員合格した。
 また、本校で初めて AFT 色彩検定1級に1名が合格した。

(3) 教職員研修計画

- ① 業界との連携（イチコイユニットサロン）による技術研修の充実
 イチコイユニットサロンとの連携による技術研修として、7月12日（水）、大峰浩喜先生による講演「そのやり方、それって本当?!」及び実技「ドライカット講習」を実施した。
- ② 東北地区教員研修会への参加
 教職員の資質向上のため、9月24日（日）～25日（月）の2日間、岩手県花巻市「湯の杜ホテル志戸平」で開催された「平成29年度東北地区理容美容学校教職員研修会」に参加した。
- ③ 外部講師による集中講義への参加
 外部講師によるネイル（6月、10月）及びメイク（6月、8月）の集中講義を受講した。
- ④ SBS 資格認定講習（ネイル、メイク、着付け）への参加
 今年度は、参加できなかった。
- ⑤ 校内研修及び研究（参観）授業の実施
 5月24日（水）に参観授業を実施するとともに、下記の通りイチコイユニットサロンオーナーやスタッフとのディスカッションを行った。
 - 5月 8日（月）「シャンプー授業について 他」
 - 7月12日（水）「シャンプー授業のフィードバック 他」
 - 10月25日（水）「ヘアモードショーの振り返り 他」
 - 11月22日（水）「恋'sコレクションについて」
 - 2月 7日（水）「恋'sコレクションについて 他」

IX. 呉竹幼稚園

1 平成29年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

- ・一面芝生に整備された園庭で思い切り遊んだり、サッカー教室を継続的に行ったりして健康な体づくりをすることができた。三学期はインフルエンザが大流行したが、誰も罹患することなく元気に過ごすことができた。
- ・あいさつや返事、自分の気持ちを言葉で伝えることなどを丁寧に指導してきた結果、仲良くする、素直に謝る、親切にするなどの道徳性が芽生えてきた。

(2) 組織改革計画

- ・施設型幼稚園として青森市子育て支援課との連絡を密にし、各種手続きを正確かつ迅速に行った。
- ・専任の事務職員がいないため、園長と教頭で予算執行、補助金関係、調査、起案等分担して行った。

2 教学に関する計画

(1) 志願者・入園者獲得の計画

- ・ホームページ「すくすく日記」の更新をこまめに行うことにより、保護者のみならず未就園児をもつ親御さんにも園の取り組みを広く伝えることができた。
- ・バスキャッチの導入でスクールバス運行の利便性が向上した。
- ・山田高校の協力による行事（サッカー教室、運動会、餅つき、未就園児クッキング）や、山田学園ならではのねぶた参加、スキー教室は幼稚園の特色となり、保護者が幼稚園を選ぶ理由の一番として上げられた。
- ・外部講師による食の研修会を参観日に開催した。食に対する捉え方を学ぶと共に、教員と保護者が一緒に参加したことで家庭との連携が図りやすくなった。

(2) 教育内容の向上目標

- ・園児への指導や分掌運営など、教頭が中心となって各教員の資質に応じた指導・援助を行ったことにより、一人一人の力量がアップした。
- ・一人一人が積極的にコミュニケーションを図り、互いに協力し補い合いながら教育活動や幼稚園運営にあたった。
- ・除雪機の購入により除雪に費やす時間が減少し、教材準備や園児と向き合う時間の確保につながった。

(3) 教職員研修計画

- ・県青私幼教員研修大会 2名参加
 - ・青私幼地区教員研修会 夏季1名・冬季5名参加
 - ・県教委新幼稚園教育要領研修会 1名参加
 - ・第13回森のようちえん全国交流フォーラム2017 in 東京 2名参加
- 全国規模の研修大会参加は、直接的な知識・技術の獲得に止まらず、視野が広がりより多くの刺激を受けることができる。今後も機会があれば参加させたい。

X. 北園幼稚園

1. 平成29年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

- ・月に1回の職員会議、週2～3回の打ち合わせと共に、学期末ごとに教育計画・教育環境の見直しを行い、教職員間で子どもの発達や興味関心について共通理解に努め、保育に当たったところ、子どもたちの中に教育目標が浸透してきている。
- ・学期・行事ごとに保護者アンケートを実施し、保護者の意見や要望を聴取して意思疎通を図ってきたところ、保護者との信頼関係を築くことができた。

自然の緑に囲まれた明るい環境の園舎を中核に、 心身のバランスのとれた基本的な力を身に付けた子供を育てる。		
主体的な活動ができる子どもの育成 子どもの興味・関心を大事にする	基本的な生活習慣の確立	多様な体験を通して豊かな感性を育てる
<ul style="list-style-type: none"> ・友達と仲良く遊ぶ ・自分の気持ちをはっきりと伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・きちんとした挨拶や返事ができる ・自分のことは自分です ・最後までやり通す 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域性を活かした遊び ・青森山田学園の施設・人材の活用 ・小学校の学習を意識した文化的活動

(2) 組織改革計画

- ・年少、年長組の2クラスのため縦割り保育を取り入れ、異年齢間でのかかわりと集団活動の経験の場を設けるよう努めたところ、子どもたちは主体的に活動に取り組むことができるようになったと共に、基本的な生活習慣の確立面で著しい成長が見られた。
- ・教職員間の職務分掌を再確認し職務に当たったところ、教育活動・事務など速やかに進めることができた。

2. 教学に関する計画

(1) 志願者・入学者獲得の計画

- ・ホームページやフェイスブックなどの更新により認知度は上がってきており、未就園児教室の参加者の多くが閲覧しているとのことであった。
- ・チラシのポスティングや掲示などに努めたところ、未就園児教室参加者の多くが掲示を目にしていたようである。
- ・未就園児教室で月に2回体操教室を実施したところ、参加者は徐々に増え年度後半には7～10組の参加があった。年度の途中で満3歳児での入園者は3名であった。

(2) 教育内容の向上目標

- ・体操教室、サッカー教室を通して運動能力の基礎が身についてきている。
- ・外国人講師による英語教室により、子どもたちは自然に英語や異文化に親しむことができている。
- ・園児数の減少により縦割り保育を取り入れて2年が経過したが、集団生活を通して協力し助け合う喜び、他の人に対する思いやりの心が育まれてきている。

- ・動物との触れ合いや野菜の栽培など自然との触れ合いを通して、子どもたちの中に思いやりの心が育っている。

(3) 教職員研修計画

- ・外部研修への参加、園内研修の実施により幼児の発達理解に努めると共に、教員の自己研鑽に努めた。

- ・外部研修会

青森県私立幼稚園連合会教員研修大会

十和田市教育委員会特別支援研修会

十和田市教育委員会幼保小連携協議会

十和田市私立幼稚園協会教員研修会

上十三保健所研修会

- ・園内研修

研修会への参加報告

指導計画の見直し

教育計画、教育環境の見直しと話し合い

XI. 螢ヶ丘幼稚園

1. 平成29年度の基本構想

(1) 教育理念や使命

- ・機会をとらえて、保護者に教育目標について話したり、園内に掲示したりすることで、園の方針を理解してもらっていることが学校評価からもうかがわれ、様々なことで協力してもらうことができた。
- ・青森山田学園の施設・人材を活用することで、意欲的に活動に取り組むことができた。特に、高校生や大学生との交流を喜び、憧れをもって活動に取り組むことができた。保護者からも、サッカーやスキー等青森山田学園関連の活動が充実していることが高く評価されている。

(2) 組織改革計画

- ・転園児2名の増により、10月から利用定員区分を「～15人」→「16～25人」にして運営。

園児数は、年長 7名、年中 5名、年少 8名 計 20名

2. 教学に関する計画

(1) 入園志願者獲得の計画

- ・未就園児教室のチラシ配布区域を拡大したことや体操教室を月1回開催することで、昨年度より参加者も増え、毎回7～8人の参加があった。しかし、2歳児の入園希望者が多く、現状では満3歳まで入園を待ってもらっている状態である。

(2) 教育内容の向上目標

- ・週1回の体操教室や縦割り保育を教育課程に位置付けることで、体力向上が図られ、思いやりや信頼感などの情意面でも成長が見られた。
- ・縦割り保育での話し合い活動、制作活動後の発表活動など言葉による表現の場を多くしたことや、充実した体験活動をすることで人前でも話すことが増えてきた。しかし、まだ自分の思ったことを思うように話せないことも多く、次年度も引き続き取り組む必要がある。
- ・除雪機の購入により、除雪が広範囲で行われ、子どもたちの雪遊びの場を確保できた。本園の特徴でもある自然環境を生かした保育が四季を通して行ってきた。
- ・インクルーシブ教育に向けて特別支援補助者を配置し、情報や対応の仕方を共有し、一人一人の子どもを大事にした保育を行った。子どもや保護者の相互理解が深まった。

(3) 教育研修計画

子ども主体の活動がなされるような展開に努めると共に、教員の自己研鑽に努めた。

○園外研修

- ・青森県教育委員会主催研修会（教育課程、健康・体力アップ）・・・8月
- ・青森県私立幼稚園連合会主催教員研修会（新幼稚園教育要領）・・・6月、8月
- ・青森市私立幼稚園協会主催教員研修会・・・8月、1月
- ・青森市主催教育施設職員研修会（特別支援）・・・5月、7月
- ・他教育機関主催研修会（特別支援教育、公開発表会）・・・7月、12月
- ・青森山田学園幼稚園保育園合同研修会・・・10月

○園内研修

- ・特別支援教育について（講師 元市教育相談員）・・・4月
- ・研修会への参加報告・・・職員会議時
- ・指導計画の見直し・・・5月
- ・保育内容、指導、行事について・・・8月、1月